

本庄市遺跡調査会報告 第12集

城 山 遺 跡

圓心寺本堂建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

本 庄 市 遺 跡 調 査 会

城 山 遺 跡

圓心寺本堂建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 5

本 庄 市 遺 跡 調 査 会

序

本書に報告の城山遺跡は、弘治2年（1556年）本庄宮内少輔実忠の築城と伝えられる本庄城の跡として著名であり、当市のシンボリックな遺跡として広く知られていますが、一方でこの遺跡には古墳時代から奈良・平安時代にかけての大規模な集落も展開していることが判明しています。かつて本庄市役所の建設に先立って実施された発掘調査の際には、約200棟にも及ぶ古代の竪穴住居跡が検出され、かつてこの周辺に大きな古代の集落が存在していたことが知られるようになりました。今回の調査においても、そのような古代集落の一部が発見されていますが、とりわけ、このたびはこれまで市内では検出例の少ない古墳時代中期前半の竪穴住居跡2棟が良好な状態で確認され、当時の生活を物語る数多くの貴重な遺物が出土し注目されることです。

付近は地形上本庄台地の北縁部にあたり、洪水にも見舞われることなく、その一方で伏流水の恵みによって水の便も良く、江戸時代以降は宿場町が発達し、現在でも当市における中心市街地の一角を占めています。城山遺跡に見られる拠点的な古代集落の存在は、生活の場としてこの地が大昔からいかに適地であったかを物語る資料といえましょう。

今後は、本書が学術研究をはじめ、生涯学習や学校教育の場に広く活用されるとともに、さらなる埋蔵文化財保護の推進に寄与することを希望する次第です。

最後になりましたが、当遺跡調査会の埋蔵文化財保存事業に格別のご理解を賜り、現地発掘調査から、資料の整理調査、さらには本書の刊行に至るまで多大なご協力を頂戴した宗教法人圓心寺様には、ここにあらためて深甚の謝意を表する次第です。また、調査に際してご指導、ご教示を賜りました方々、発掘現場で直接作業の労にあられた皆様にご心からの御礼を申し上げます。

平成17年5月

本庄市遺跡調査会
会長 福島 巖

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市大字本庄3-3-2に所在する城山遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は埼玉県本庄市3丁目1,551番1の土地に、宗教法人圓心寺代表役員石田祐寛氏が計画する本堂建設に伴い、事前の記録保存を目的として本庄市遺跡調査会が実施したものである。
3. 発掘調査は、城山遺跡の305.4㎡を対象として実施した。
4. 発掘調査期間は以下のとおりである。
自 平成17年1月12日
至 平成17年1月20日
5. 発掘調査担当者は以下のとおりである。
本庄市遺跡調査会 調査員 太田博之
同 松本 完
6. 整理期間は以下のとおりである。
自 平成17年1月21日
至 平成17年5月18日
7. 整理調査担当者は以下のとおりである。
本庄市遺跡調査会 調査員 太田博之
8. 整理・編集作業は有限会社毛野考古学研究所に委託した。
9. 本書の執筆はⅠを本庄市教育委員会事務局が、Ⅱ～Ⅴを有限会社毛野考古学研究所調査部調査員山本千春が担当した。
10. 本書の編集は山本千春が担当した。
11. 本書に掲載した出土遺物、遺構及び遺物の実測図ならびに写真、その他の本報告書に関係する資料は本庄市教育委員会において保管している。
12. 発掘調査及び整理調査、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜りました。御芳名を記し、感謝申し上げます。(敬称略)
小出拓磨 高橋清文 常深 尚 土井道昭 長井正欣 日沖剛史 和久裕昭
13. 城山遺跡発掘調査及び整理調査にあたり、御協力頂いた作業員の方々は下記のとおりである。
調査参加者
発掘調査 池田一彦 金井一郎 金井梧郎 河田倫子 木島寛 小暮悠樹 塩原晴幸 高田和正
高橋辰馬 滝沢美知子 土屋牧子 柳川恵美子
整理作業 青木美恵子 阿部美智子 石田満理 磯洋子 樺澤美枝 樺澤佳美 久保田寿子
鈴木三枝子 関小百里 高橋百合子 深谷道子 真下弘美 柳井有子

14. 城山遺跡の発掘調査、整理調査及び報告書刊行にかかる本庄市遺跡調査会の組織は以下のとおりである。

◆平成16年度 発掘調査、整理調査

会 長 福島 巖 [本庄市教育委員会教育長]
理 事 揖斐 龍一 [本庄市教育委員会事務局長 (会長代理)]
同 柴崎三起雄 [本庄市文化財保護審議委員]
同 野村 廣久 [同]
監 事 八木 茂 [本庄市行政委員会事務局長]
堀口恭仁子 [本庄市会計課長]
幹 事 吉田 敬一 [社会教育課長]
桜場 幸男 [社会教育課長補佐]
吉田 稔 [社会教育課文化財保護係長]
斉藤みゆき [社会教育課文化財保護係主査]
太田 博之 [同]
松本 完 [社会教育課題時職員]
逆井 洋美 [同]
調 査 員 太田 博之 [社会教育課文化財保護係主査]
松本 完 [社会教育課題時職員]
逆井 洋美 [同]

◆平成17年度 発掘調査、整理調査

会 長 福島 巖 [本庄市教育委員会教育長]
理 事 揖斐 龍一 [本庄市教育委員会事務局長 (会長代理)]
同 柴崎三起雄 [本庄市文化財保護審議委員]
同 野村 廣久 [同]
監 事 八木 茂 [本庄市行政委員会事務局長]
依田由美子 [本庄市会計課長]
幹 事 吉田 敬一 [社会教育課長]
桜場 幸男 [社会教育課長補佐]
上野 良一 [同]
吉田 稔 [社会教育課文化財保護係長]
斉藤みゆき [社会教育課文化財保護係主査]
太田 博之 [同]
松本 完 [社会教育課題時職員]
的野 善行 [同]
調 査 員 太田 博之 [社会教育課文化財保護係主査]
松本 完 [社会教育課題時職員]
的野 善行 [同]

凡 例

1. 本書所収の遺跡全体図におけるX・Y座標値は国家標準座標第IX系に基づく。各遺構図における方位針は、座標北を示す。
2. 本書に使用した地図の発行者及び縮尺等については、各国キャプションに示した。
3. 本調査における遺構名称は下記の記号で示し、本書掲載の本文、挿図、写真図版中の遺構名称も同一の記号を用いた。
SI…竪穴住居跡 SD…溝状遺構 SK…土坑 P…ピット SX…不明遺構
4. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は以下を原則とし、各挿図中にはスケールを付してある。
【遺構図】
全体図…1：100 SI…1：60 SD…平面図1：100・土層図1：60 SK…1：60
SX…1：60
【遺物実測図】
弥生土器・円筒埴輪・土師器・須恵器・かわらけ・陶器・土製品・石製品…1：4
5. 遺構の土層及び遺物観察表に示した色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）を使用して観察した。
6. 遺物観察表中の単位は、法量がcm、重さがgである。
7. 遺物観察表に示した計測値の（ ）は復元推定値を示す。
8. 藪編み石、特に加工痕の認められない石、粘土塊については、写真と計測値のみの掲載とした。

目 次

序	本庄市遺跡調査会会長 福島 巖
例 言	
凡 例	
目 次	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 調査の方法と経過	4
1 調査の方法	4
2 調査の経過	4
IV 調査の成果	6
1 遺跡の概要	6
2 検出された遺構と遺物	6
(1) 竪穴住居跡	6
(2) 溝状遺構	18
(3) 不明遺構	19
(4) 遺構外出土遺物	20
V ま と め	21
写真図版	
抄 録	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図……………	2	第10図 S I-01出土遺物(3)……………	10
第2図 周辺の遺跡……………	3	第11図 S I-01出土遺物(4)……………	11
第3図 城山遺跡位置図……………	4	第12図 S I-02……………	16
第4図 城山遺跡全体図……………	5	第13図 S I-02出土遺物……………	17
第5図 基本層序……………	6	第14図 S D-01……………	18
第6図 S I-01……………	7	第15図 S D-01出土遺物……………	19
第7図 S I-01遺物分布図……………	8	第16図 S X-01……………	19
第8図 S I-01出土遺物(1)……………	8	第17図 遺構外出土遺物……………	20
第9図 S I-01出土遺物(2)……………	9	第18図 S I-01・02出土高坏……………	21

表目次

第1表 S I-01出土遺物観察表(1)……………	12	第6表 S I-02出土遺物観察表(1)……………	17
第2表 S I-01出土遺物観察表(2)……………	13	第7表 S I-02出土遺物観察表(2)……………	18
第3表 S I-01出土遺物観察表(3)……………	14	第8表 S D-01出土遺物観察表……………	19
第4表 S I-01出土遺物観察表(4)……………	15	第9表 遺構外出土遺物観察表……………	20
第5表 S I-01出土遺物観察表(5)……………	16		

写真図版目次

写真図版1 遺跡の位置と周辺の地形	S I-02藍編み石出土状況
写真図版2 調査区全景	S D-01
S I-01	S D-01土層断面
写真図版3 S I-01掘り方	S X-01
S I-01貯蔵穴	写真図版7 S I-01出土遺物①
S I-01内SK-01遺物出土状況	写真図版8 S I-01出土遺物②
写真図版4 S I-01遺物出土状況①	写真図版9 S I-01出土遺物③
S I-01遺物出土状況②	写真図版10 S I-02出土遺物①
S I-01遺物出土状況③	写真図版11 S I-02出土遺物②
写真図版5 S I-02	S D-01出土遺物
S I-02掘り方	遺構外出土遺物
S I-02遺物出土状況①	写真図版12 S I-01高坏脚部内面
写真図版6 S I-02遺物出土状況②	S I-02高坏脚部内面

I 調査に至る経過

平成16年7月12日、本庄市本庄3-3-2宗教法人圓心寺代表役員石田祐寛氏から、本庄市本庄3丁目1,551番1の土地、約2,307㎡の土地に本堂建設の計画があり、これにかかる「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」の照会が本庄市教育委員会に提出された。本庄市教育委員会が埼玉県教育委員会発行の「本庄市遺跡分布地図」をもとに同地の埋蔵文化財包蔵地の有無を調査したところ、当該の事業計画地には、周知の埋蔵文化財包蔵地城山遺跡(53-159)が所在することが判明した。

城山遺跡はそれまでに発掘調査が実施された経緯はないものの、南側に谷地形を望む台地の縁辺部にあって、いかにも古代集落の存在を窺わせる地理的な条件を備えていた。また、北方200mの地点に存在する本庄市役所周辺にも、古墳時代から奈良・平安時代にかけての大規模な集落が展開することから同遺跡の範囲が事業予定地まで延伸している可能性も考えられた。さらに、付近一帯は中世末から近世初頭にかけて所在した本庄城の区域にも想定されており、これに関連する遺構の存在も予想された。

本庄市教育委員会では、以上のような状況をふまえ、当該事業計画地について、埋蔵文化財の試掘調査を行うこととし、旧本堂解体後の平成17年1月6日・11日の両日、現地調査を実施した。その結果、当該埋蔵文化財包蔵地において、古墳時代中期の住居跡2棟および近世の土坑群を確認し、土師器破片その他の遺物を検出した。

本庄市教育委員会では、以上の試掘調査の結果に基づいて、「埋蔵文化財の所在および取扱いについて」の回答を事業者あて送付し、1、協議のあった土地については周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡(53-159)が所在することから現状保存が望ましいこと、2、やむを得ず現状変更を実施する場合は、文化財保護法第57条2第1項の規定に基づき、埼玉県教育委員会あて埋蔵文化財発掘の届出を提出すること、3、埋蔵文化財発掘の届出を提出の後は埼玉県教育委員会の指示に従い、当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4、本回答後は関係機関との協議を徹底することの旨を通知した。

その後、協議を重ねた結果、他に本堂建設の適地がなく、事業者である宗教法人圓心寺との間で契約を締結したうえで本庄市遺跡調査会が調査主体となり、発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査のための手続きは、平成17年1月14日付けで、事業者から文化財保護法第57条2第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、本庄市教育委員会ではこれを受けて、平成17年1月14日付け本教社発第290号で埋蔵文化財発掘届出の取扱いについての副申を添え、同届出を平成17年1月14日付け本教社発第289号で埼玉県教育委員会あて進達した。また、平成17年1月19日付け本遺会発第1号で本庄市遺跡調査会から埋蔵文化財発掘調査の届出が提出され、本庄市教育委員会ではこれを受けて、平成17年1月19日付け本教社発第306号で埼玉県教育委員会あて進達した。

現地における発掘調査は平成17年1月12日から平成17年1月20日までの期間で実施した。

(本庄市教育委員会事務局)

II 遺跡の環境

1 地理的環境

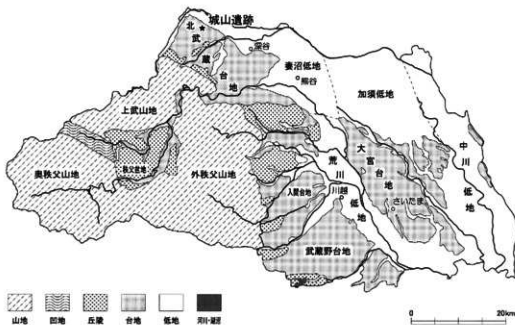
城山遺跡はJR本庄駅より北に約630m、圓心寺の敷地内に所在する。地形的には市街地を中心とする本庄台地の北縁辺部に位置する。本庄台地は北武蔵台地北端の台地で、神流川の洪積作用によって形成された複合扇状台地である。この扇状地は児玉郡神川村大字寄島地区を扇頂地とし、扇端地は本庄市北側の縁辺から女堀川と小山川が合流する大字東五十子までみられる。台地より北側は、市域を東流する女堀川の浸食によって形成された高さ4～12mの段丘崖があり、東西に渡って約8km程続く。この段丘の更に北方は利根川の右岸にあたる低地帯が広がり、妻沼低地、加須低地へと連なっている。

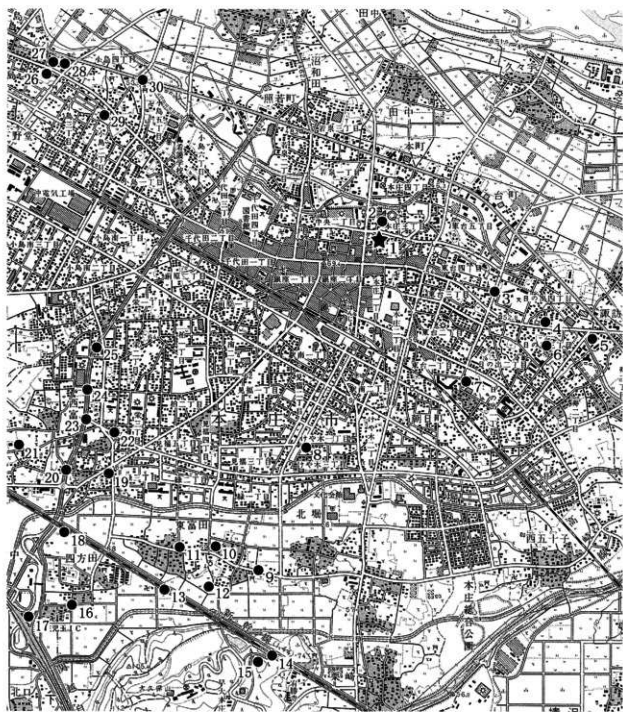
2 歴史的環境

本遺跡周辺では主に古墳時代～奈良・平安時代の集落跡や中世末～近世初頭の本庄城が確認されている。ここでは古墳時代中期を中心として周辺遺跡を概観しておく。

古墳時代中期の集落跡は、段丘崖地区と大字西富田地区を中心に数多くみられる。前者は本遺跡より北側の段丘崖沿いに位置し、西から東に向けて、本町遺跡、本遺跡より東約840mにある薬師堂遺跡(3)、諏訪新田遺跡(5)、本庄台地東端にある東五十子遺跡等が知られている。後者では二本松遺跡(25)、夏目遺跡(24)、西富田新田遺跡(21)、社具路遺跡(20・23)、本郷遺跡などがある。前期より継続する可能性を持つ遺跡もあるが、ほとんどが古墳時代中期より出現し、奈良・平安時代まで営まれている。

古墳は、中期前半より前期後半まで遡る可能性がある前山1号墳(15)をはじめ、女堀川・小山川・志戸川の流域を中心に築造されるようになる。中期前半の前山2号墳(14)、中墳には格子目叩きの円筒埴輪と盾や家などの形象埴輪を有する公郡塚古墳が築造され、旭・小島古墳群の三笠山古墳の2基、やや後続してB種横ハケ調整の円筒埴輪を有する塚古墳群(7)などが知られる。なお、本遺跡からは円筒埴輪片が出土しており、近接地に未周知の古墳が存在していた可能性も考えられる。





1. 城山遺跡 2. 本庄城 3. 薬師堂遺跡 4. 御堂坂遺跡 5. 諏訪新田遺跡 6. 御堂坂古墳群
 7. 塚合古墳群 8. 笠ヶ谷戸遺跡 9. 久下東遺跡 10. 公卿塚古墳 11. 熊野十二社神社古墳 12. 七色塚遺跡 13. 下田遺跡 14. 前山2号墳 15. 前山1号墳 16. 四方田遺跡 17. 後張遺跡 18. 九反田遺跡
 19. 本郷遺跡 20. 社具路遺跡(南部) 21. 西富田新田遺跡 22. 南大通り線内遺跡 23. 社具路遺跡(北部)
 24. 夏目遺跡 25. 二本松遺跡 26. 三笠山古墳 27. 三笠山1号墳 28. 三笠山2号墳 29. 御手長山古墳 30. 小島本伝遺跡

第2図 周辺の遺跡(国土地理院発行「本庄」、S=1:25,000)

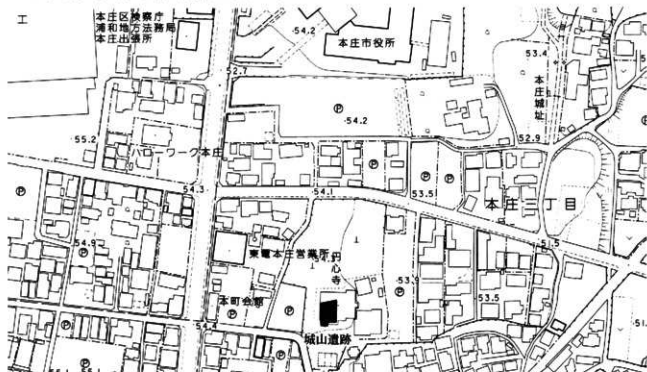
III 調査の方法と経過

1 調査の方法

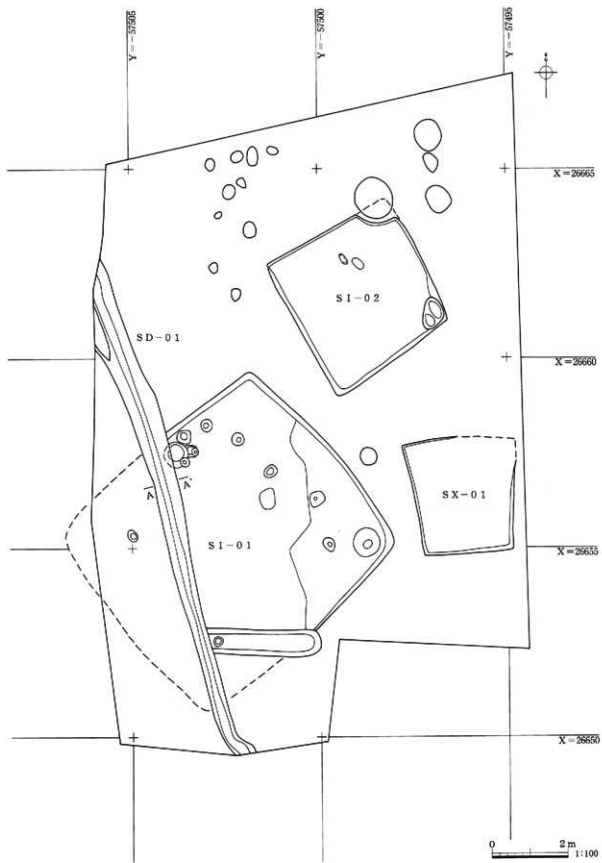
今回、城山遺跡において竪穴住居跡、溝状遺構、不明遺構の他、土坑及びピットが検出された。ただし、圓心寺敷地内という場所柄、歴代の基坑を掘り起こしかねないという危惧から、土坑及びピットについては調査を行わないこととなった。発掘調査は、表土を重機により遺構確認面まで掘り下げ、人力による遺構の確認及び調査を行った。現地実測の基準として方眼基準杭及び基準点を設置し、遺構平面図・遺物分布図・土層断面図は手実測及びトータルステーションにより、縮尺1/20・1/40で作成した。遺構の写真撮影は白黒35mm、カラーネガ35mm、カラー・リバーサル35mmを使用し、調査の進捗状況に応じて随時撮影を行った。遺構全体写真は白黒6×7判、各35mmで撮影した。遺跡の略号は53-159とし、出土遺物の注記等にはこれを用いた。遺物の取り扱いについては、接合にセメダインC、復元にエポキシ系樹脂、写真撮影には白黒6×7判を使用した。

2 調査の経過

発掘調査は調査面積305.4mを対象に、平成17年1月12日～平成17年1月20日まで行った。以下、調査の概要を記す。12日発掘作業員が就業し、調査を開始する。発掘機材等の搬入。竪穴住居跡の遺構調査（遺構掘削・記録写真の撮影・図面作成等、以下省略）を行う。13日基準点測量を行い、調査区内に基準杭及びグリッド杭を設置する。SI-01から多くの土師器が出土したため、遺物分布図及び測量を行う。17日溝状遺構の遺構調査を並行して行なう。18日調査区内の清掃を行い、全景写真を撮影する。19日（～20日）SI-01において、床面下より主柱穴4基を検出する。20日遺構の掘削及び計測作業を終え、調査区内の清掃作業を行い、全景写真を撮影する。機材を撤収し、発掘調査を終了する。整理調査は平成17年1月21日から平成17年5月18日まで実施し、平成17年5月25日付で報告書を刊行した。



第3図 城山遺跡位置図（本庄市都市計画図12、S=1:2,500）



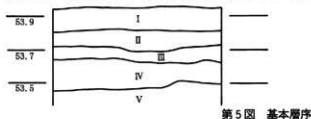
第4図 城山遺跡全体図

IV 調査の成果

1 遺跡の概要

本遺跡は本庄台地の北縁辺部、圓心寺地内に立地する。今回の調査では、竪穴住居跡2軒、溝状遺構1条、不明遺構1基が検出された。竪穴住居跡2軒からは、古墳時代中期の土師器等の遺物が出土している。特に、SI-01からは多量の遺物が出土しており、当該期の貴重な資料を得ることができた。

本遺跡の周辺には、古墳や古墳時代～奈良・平安時代の集落が分布している。今回の調査では調査面積の制限があったものの、古墳時代中期集落の一端を明らかにすることができた。また、ごく僅かな点数ではあるが、弥生時代と思われる土器片や円筒埴輪片、須恵器片、かわらけ、陶磁器片、土錘、リタッチドフレイクが出土している。なお、本遺跡における基本層序は下記のとおりで、遺構の確認はⅢ、黒褐色土で行った。



- | | |
|-----------|----------------|
| I. 褐色土 | 砂礫・ガラス等を多量含む。 |
| II. 灰褐色土 | 炭化物を微量含む。 |
| III. 黒褐色土 | ローム粒・炭土を微量含む。 |
| IV. 黒褐色土 | ローム粒・炭化物を微量含む。 |
| V. 明黄色土 | ローム層。 |

第5図 基本層序

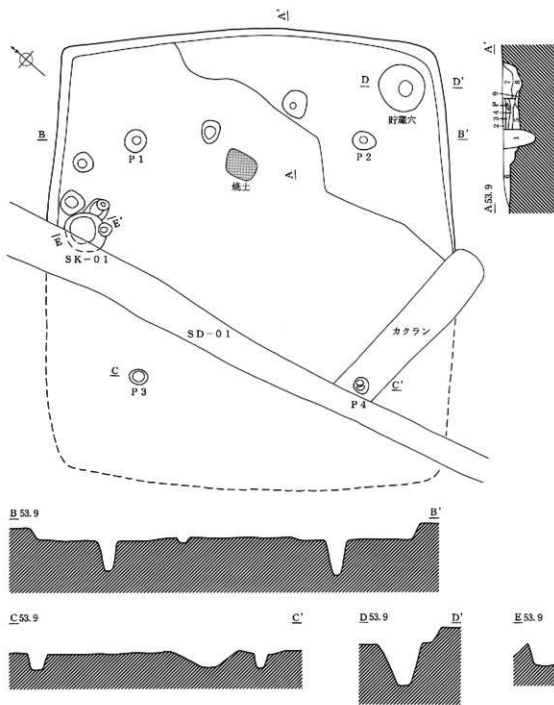
2 検出された遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

検出された竪穴住居跡は2軒である。両住居跡から古墳時代中期の埴・高坏・甕等の土師器が出土したが、これらはわずかながら時期差を伴うものと想定される。

SI-01(第4・6～11図、写真図版2～4・7～9・12)

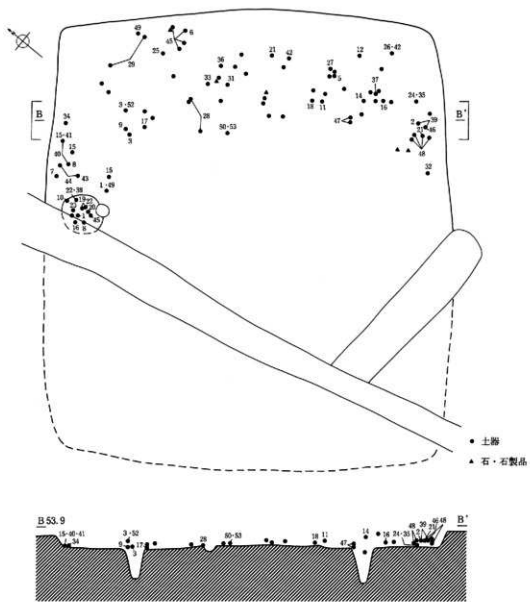
位置:調査区の南西側に位置する。**形状・規模:**住居跡の西側部分をSD-01及び攪乱により壊されているが、後述する4基の支柱穴配置から(長)方形を呈する可能性が高い。規模は南北軸6.5m、東西軸は同じく支柱穴配置から7.2m前後と想定される。**長軸方位:**N-52°-Eを指す。**床面:**確認面からの深度は北側で11～18cm、南東側で20～29cmを測る。4～12cmの厚さで黒褐色土とロームの貼り床を施すが、やや凹凸がみられる。掘り方は住居跡中央がやや高い状態にある。**貯蔵穴:**南東隅部に位置する。平面形は円形を呈し、規模は0.74m×0.72m、深度は63cmを測る。また、住居跡の北西からSK-01が検出されている。平面形は楕円形を呈し、規模は0.70m×推定0.61m、深度は37cmを測る。本住居跡の付帯施設と想定され、貯蔵穴の可能性も考えられる。**柱穴:**4基の支柱穴が確認された。各柱間の心々距離は、P-1～P-2が3.64m、P-3～P-4が3.56m、P-1～P-3が3.74m、P-2～P-4が3.90mで、ほぼ方形の配置にあるが、東西間の方が南北間よりも14～30cmほど長い。**炉跡:**地床炉と思われるが、明確な掘り込みは把握できなかった。住居跡の中央部やや東側で焼土が確認されている。**遺物出土状況:**攪乱により壊されている西側部分を除いて遺物が出土した。貯蔵穴からは土師器と薦編み石6点が出土した。SK-01の覆土中からも土師器が出土し、この内数点(16・19・45他)は住居跡出土遺物と接合した。また、28・33・39・41はSI-02の一括遺物と接合し、床下出土遺物もSI-02の土師器甕(6)と接合している。出土遺物の想定点数は、土師器埴15点以上・高坏45点以上・甕13点以上、薦編み石8点、剥片1点、円筒埴輪片1点、炭化種子1点にのぼる。土師器は埴・高坏・甕の3器種にほぼ限定され、他の器種は確認できなかった。また、高坏が土師器全体の6割以上を占めている。炭化種子は小片で、樹種は不明である。**時期:**出土遺物の特徴から5世紀(前葉～)中葉と想定される。



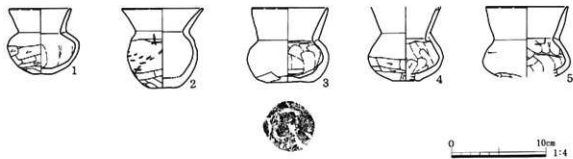
SI-01 土層説明

1. 黒色土 ローム粒・炭化物を微量含む。
2. 暗赤褐色土 炭化物を微量、焼土を多量含む。
3. におい赤褐色土 炭化物を微量、焼土を大量に含む。
4. 暗赤褐色土 炭化物を微量、焼土を多量含む。
5. 黒褐色土 黒褐色土と焼土の混合土。
6. 黒褐色土 ローム粒・炭化物を微量、焼土を少量含む。
7. 黒褐色土 ローム粒少量、炭化物・焼土を微量含む。
8. 黒褐色土 ローム・ローム粒多量、炭化物・焼土を微量含む。
9. におい黄褐色土 ローム層を主に、黒褐色土を少量含む。

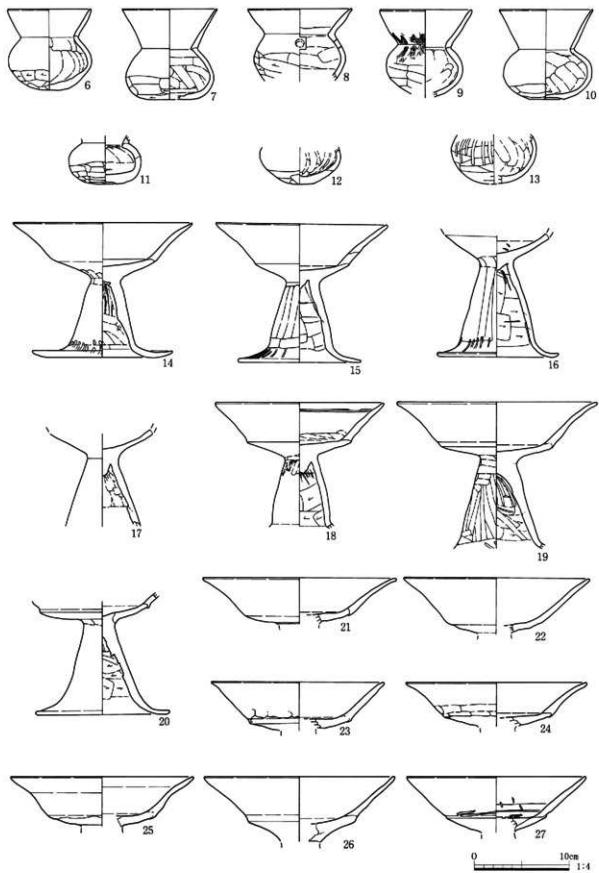
第6図 SI-01



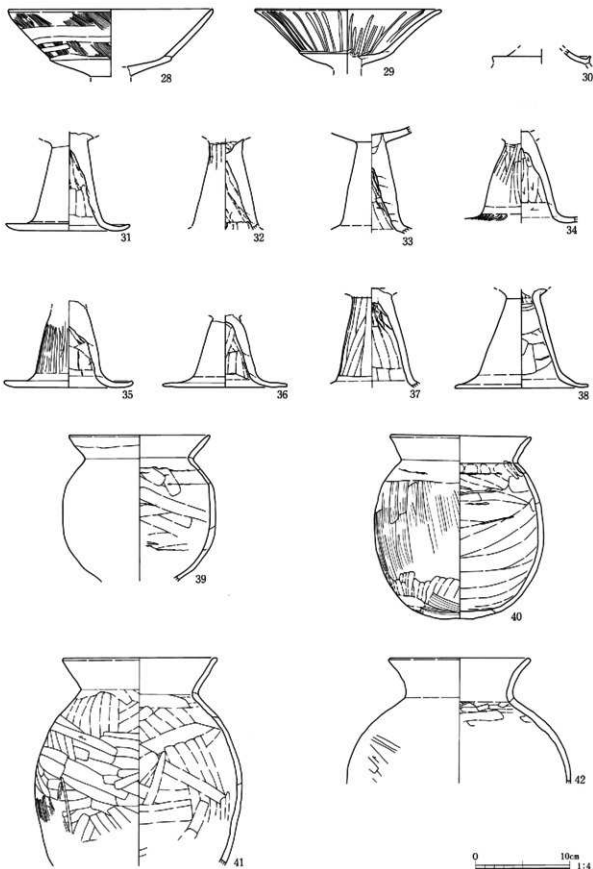
第7図 SI-01遺物分布図



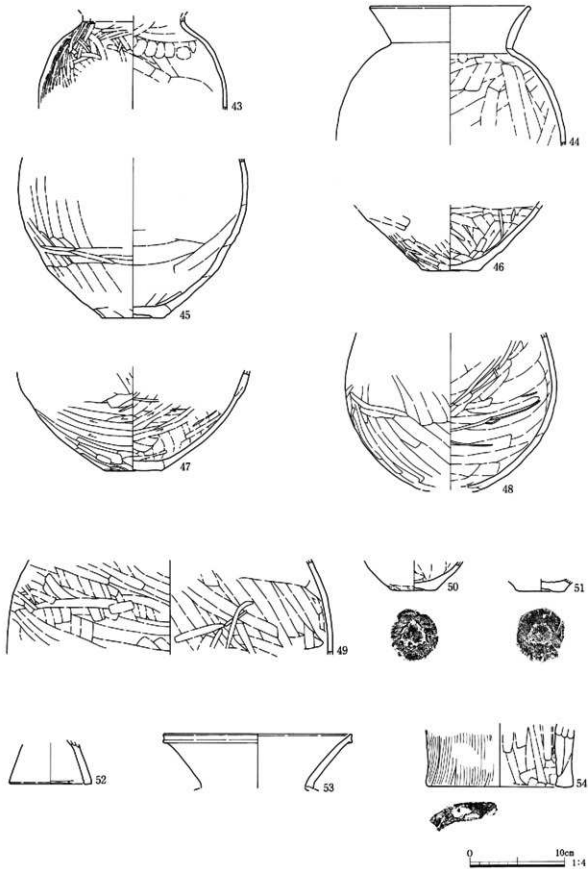
第8図 SI-01出土遺物(1)



第9圖 SI-01出土遺物(2)



第10図 SI-01出土遺物(3)



第11图 SI-01出土遺物(4)

第1表 SI-01出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 埴	口径 6.6 底径 2.0 器高 6.9	体部は上位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は小さな平底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後上位ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	角閃石・白色粒 内外一赤褐色	口縁部一部及び体部～底部1/4欠損。
2	土師器 埴	口径(8.7) 底径(2.4) 器高(8.4)	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は平底。	外面—口縁部～頸部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後、不明瞭だが体部断片的に斜位のミガキ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部器面荒れる。	石英・白色粒 内外一ふい褐色	口縁部～底部2/3残存。
3	土師器 埴	口径(8.1) 底径 5.0 器高 7.9	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は平底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。体部下端ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	石英・赤褐色粒 内外一灰褐色	口縁部1/2及び体部一部欠損。
4	土師器 埴	口径— 底径(2.9) 器高—	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部はやや上げ底。	外面—口縁部～頸部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後上位ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	角閃石・白色粒 内外一ふい赤褐色	口縁部～底部1/3残存。
5	土師器 埴	口径(8.6) 底径— 器高—	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部はやや内湾気味に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後上位ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	石英・白色粒 内一ふい黄褐色 外一黄褐色	口縁部～体部1/3残存。
6	土師器 埴	口径 8.9 底径— 器高 8.6	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後上位ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	チャート・白色粒 内外一明赤褐色	完形。
7	土師器 埴	口径(10.1) 底径(4.8) 器高 9.5	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は平底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後上位ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	角閃石・白色粒 内一灰黄褐色 外一赤褐色	口縁部1/5及び体部～底部1/2残存。
8	土師器 埴	口径(11.1) 底径— 器高—	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は内湾的に開く。体部上位に焼成前に成形された穿孔一ヶ所あり。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後上位ナデ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。	チャート・白色粒 内外一赤褐色	口縁部～体部1/2残存。
9	土師器 埴	口径 9.7 底径— 器高—	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。器面荒れる。	外面—口縁部上位ヨコナデ、口縁部下位～体部上位ハケナデ、下部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	チャート・白色粒 内外一明赤褐色	体部～底部1/2欠損。
10	土師器 埴	口径 9.9 底径 3.7 器高 9.5	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。底部は上げ底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後、上位ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	チャート・白色粒 内一赤褐色 外一明赤褐色	3/4残存。
11	土師器 埴	口径— 底径 2.4 器高—	体部は中位に膨らみを持つ。底部は上げ底。	外面—体部～底部ヘラケズリ後、上位ナデ。内面—体部指ナデ、底部ナデ。	石英・黒色粒 内一褐色 外一ふい褐色	体部～底部1/2残存。
12	土師器 埴	口径— 底径— 器高—	体部は中位に膨らみを持つ。底部は丸底。	外面—体部～底部ヘラケズリ後、上位ナデ。内面—体部指ナデ。	チャート・白色粒 内外一明赤褐色	体部～底部1/4残存。
13	土師器 埴	口径— 底径— 器高—	体部は中位に膨らみを持つ。	外面—体部ヘラケズリ後ナデ、中位に一部ヘラケズリ残る。上位に放射状のミガキ。内面—体部指ナデ。	白色粒 内外一ふい褐色	体部1/3残存。

第2表 SI—01出土土物観察表(2)

No	器種	流量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
14	土師器 高坏	口径(19.0) 底径(14.9) 器高 14.3	坏部は下部に弱い稜を持ち、口縁部は外反して開く。脚部は直線的に開き、裾部広がる。	外面—口縁部ヨコナデ、坏部器面寬れ、やや不明瞭。坏部下位—脚部ヘラケズリ後ナデ、裾部放射状のミガキ。内面—口縁部〜坏部下位ヨコナデ、底部器面寬れ、不明瞭。脚部上位絞り目、中〜下位ナデ、裾部ヨコナデ。	角閃石・白色粒 内—赤褐色 外—明赤褐色	坏部1/6及び裾部3/5欠損。
15	土師器 高坏	口径(18.2) 底径 13.0 器高 14.6	坏部は下部に稜を持ち、口縁部は外反して開く。脚部は下位に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面—口縁部ヨコナデ、坏部下位器面寬れ、不明瞭。脚部ヘラケズリ後ナデ、裾部放射状のミガキ。内面—口縁部〜坏部下位ヨコナデ、脚部ヘラケズリ、裾部ヨコナデ。	白色粒 内外—明赤褐色	口縁部〜坏部下位及び裾部1/2欠損。
16	土師器 高坏	口径— 底径(12.8) 器高—	脚部は直線的に開き、裾部広がる。	内外面器面やや寬れる。外面—脚部不明瞭だが、ヘラケズリ後ナデ、裾部ミガキ。内面—坏部底面ナデ、脚部ヘラケズリ、裾部ヨコナデ。	白色粒・角閃石 内—ふい赤褐色 外—明赤褐色	坏部上位、脚部一部及び裾部欠損。
17	土師器 高坏	口径— 底径— 器高—	坏部及び脚部は直線的に開く。	内外面器面寬れる。外面—ナデ調整か、内面—ナデ調整か、脚部上位指ナデ、下位ヨコナデ。	チャート・白色粒 内外—明赤褐色	坏部下位1/2及び脚部1/3残存。
18	土師器 高坏	口径(18.0) 底径— 器高—	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部は僅かに膨らみ、裾部広がる。	外面—坏部ヨコナデ、坏部下位ヘラケズリ後ナデ、脚部ナデ。内面—坏部ヨコナデ、脚部上位絞り目、下位ヘラケズリ。	角閃石・白色粒 内外—赤褐色	口縁部1/2、脚部1/4及び裾部欠損。
19	土師器 高坏	口径(21.1) 底径— 器高—	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反する。脚部は僅かに膨らむ。	外面—器面寬れる。坏部ヨコナデ、脚部ヘラナデ。裾部は不明瞭だが、放射状のミガキあり。内面—坏部ヨコナデ、脚部上位絞り目、下位ヘラケズリ後ナデ、裾部ヨコナデ。	チャート・赤褐色粒 内外—橙褐色	坏部1/3及び裾部欠損。
20	土師器 高坏	口径— 底径 14.2 器高—	坏部下位に稜を持つ。脚部は僅かに膨らみ、裾部は広がる。	外面—坏部下位ナデ、脚部器面寬れ、不明瞭。脚部上位ナデか。裾部ヨコナデ。内面—坏部底面ヨコナデ、脚部上位絞り目上に螺旋状に工具痕、下位ヘラナデ、裾部ヨコナデ。	角閃石・チャート 内外—橙褐色	坏部及び裾部一部欠損。
21	土師器 高坏	口径 20.7 底径— 器高—	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反する。SI—01N22と胎土や形類、成形技法が似る。	外面—口縁部〜坏部上位ヨコナデ、下位器面寬れる。内面—口縁〜底部ヨコナデ。	石英・細砂粒 内外—橙褐色	坏部1/2残存。
22	土師器 高坏	口径 19.7 底径— 器高—	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反する。内外器面寬れる。SI—01N21と胎土や形類、成形技法が似る。	外面—口縁部〜坏部上位ヨコナデ、下位ナデ。内面—口縁部〜底部ヨコナデ。	チャート・細砂粒 内外—橙褐色	坏部1/2残存。
23	土師器 高坏	口径 18.5 底径— 器高—	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反する。	外面—口縁部〜坏部上位ヨコナデ、下位器面寬れ不明瞭。ヘラナデか。内面—口縁部〜坏部上位ヨコナデ、下位器面寬れ、不明瞭。	石英・黒色粒 内—赤褐色 外—明赤褐色	坏部一部欠損。
24	土師器 高坏	口径 19.1 底径— 器高—	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反する。	外面—口縁部〜坏部上位ヨコナデ、下位ナデ。内面—口縁部〜底部ヨコナデ。	チャート・黒色粒 内外—明赤褐色	口縁部〜底部2/3残存。

第3表 SI-01出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
25	土師器 高 環	口径(19.4) 底径 — 器高 —	環部下位に稜を持ち、口縁部は外反する。	外面一口縁部～環部上位ヨコナデ、下位ナデ。内面一口縁部～底部ヨコナデ。	内外一灰黄褐色	環部1/2残存。
26	土師器 高 環	口径 20.4 底径 — 器高 —	環部下位に稜を持ち、口縁部は外反する。	外面一口縁部～環部上位ヨコナデ、下位ナデ。内面一口縁部～底部ヨコナデ。	角閃石・白色粒 内外一明赤褐色	環部4/5残存。
27	土師器 高 環	口径 18.9 底径 — 器高 —	環部下位に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。	外面一口縁部～環部上位ヨコナデ、下位ナデ。内面一口縁部～底部ヨコナデ。	角閃石・白色粒 内外一明赤褐色	環部2/3残存。
28	土師器 高 環	口径(21.7) 底径 — 器高 —	環部下位に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、環部上～中位斜位のハケ目後ヨコナデ、下位ナデ。内面ヨコナデ。	角閃石・白色粒 内外一明赤褐色	環部1/2残存。
29	土師器 高 環	口径(19.8) 底径 — 器高 —	環部下位に稜を持ち、口縁部は外反する。	外面一環部上位放射状ミガキ、下位ナデか。内面一口縁部～底部放射状ミガキ。	角閃石・白色粒 内外一明赤褐色	環部1/3残存。
30	土師器 (高 環)	口径 — 底径 — 器高 —	有段脚高環の裾部片と思われる。	内外面ヨコナデ。	内外一明赤褐色	裾部分1/6残存。
31	土師器 高 環	口径 — 底径(13.1) 器高 —	脚部は直線的に開き、裾部は広がる。	外面一器面やや荒れる。脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面一脚部上位絞り目、下位ナデ、裾部ヨコナデ。	角閃石・白色粒 内面一明赤褐色 外面一褐色	脚部ほぼ完形、裾部3/4残存。
32	土師器 高 環	口径 — 底径 — 器高 —	脚部は直線的に開く。	外面一脚部上位ヘラクスリ、中～下位ナデ。内面一騎穴指ナデ、脚部上～下位絞り目、下階ヨコナデ。	石英・黒色粒 内一にふい褐色 外一明赤褐色	脚部5/6残存。
33	土師器 高 環	口径 — 底径 — 器高 —	脚部は直線的に開き、裾部は広がる。	外面一器面荒れ、不明瞭。脚部ヘラナデか、裾部ヨコナデか。内面一脚部上位絞り目、下位ナデ、裾部ヨコナデか。	角閃石・白色粒 内外一明赤褐色	底底一部及び脚部1/2残存。
34	土師器 高 環	口径 — 底径 — 器高 —	脚部は膨らみを持ち、裾部は開く。	外面一器面やや荒れ、不明瞭。脚部はヘラナデか、裾部ヨコナデ後放射状のミガキ。内面一脚部指ナデ後下位ヘラナデ、裾部ヨコナデ。	角閃石・白色粒 内外一明赤褐色	脚部ほぼ完形、裾部一部残存。
35	土師器 高 環	口径 — 底径(13.5) 器高 —	脚部は膨らみを持ち、裾部は広がる。裾部内面粘土層あり。	外面一器面剥離著しい。脚部ミガキ、裾部ヨコナデ。内面一脚部指ナデ、裾部ヨコナデ。	白色粒・細砂粒 内面一黒褐色 外面一赤褐色	脚部ほぼ完形、裾部1/3残存。
36	土師器 高 環	口径 — 底径(13.2) 器高 —	脚部は膨らみを持ち、裾部は開く。	外面一器面やや荒れ、不明瞭。ナデか。内面一脚部指ナデ、裾部ヨコナデ。	角閃石・白色粒 内外面一にふい赤褐色	脚部完形、裾部1/8残存。
37	土師器 高 環	口径 — 底径 — 器高 —	脚部は直線的に開く。	外面一やや器面荒れ、不明瞭。脚部ヘラクスリ後ナデ、脚部下端～裾部ヨコナデ。内面一脚部指ナデ、裾部ヨコナデ。	角閃石・砂粒 内一明褐色 外一にふい褐色	脚部1/2残存。
38	土師器 高 環	口径 — 底径 14.1 器高 —	脚部は直線的に開き、裾部は広がる。	外面一器面荒れ、不明瞭。脚部ヘラクスリ後ナデか、脚部下端～裾部ヨコナデ。内面一脚部ヘラクスリ、裾部ヨコナデ。	角閃石・白色粒 内外一明赤褐色	脚部完形、裾部3/4残存。
39	土師器 小型 環	口径(15.0) 底径 — 器高 —	脚部は膨らみを持ち、口縁部は僅かに内湾して開く。	外面一器面荒れ、不明瞭。口縁部はヨコナデ。内面一口縁部ヨコナデ、脚部ナデ。	石英・白色粒 内外一明赤褐色	口縁部1/2及び脚部上半2/3残存。

第4表 SI-01出土遺物観察表(4)

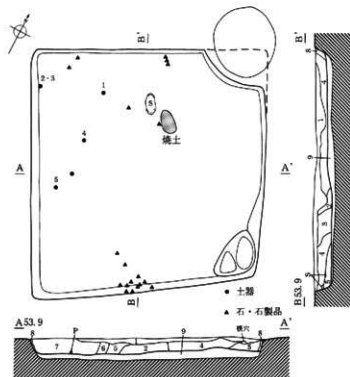
№	器種	法量(cm)	形態・成形手法的特徴	調整手法的特徴	胎土・色調	備考
40	土師器 甕	口径(14.9) 底径 3.2 器高 19.6	胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。底部はやや上げ底。	外面―胴部縦位ハケ目後口縁部～頸部ココナデ、胴部下位ナデ。 内面―口縁部ココナデ、頸部指頭圧痕、胴部～底部ナデ。	チャート・赤褐色粒 内外一褐色	口縁部2/3及び胴部一部欠損。
41	土師器 甕	口径16.5 底径― 器高―	胴部は中位に膨らみを持つ。口縁部は直線的に外反して開く。	外面―口縁部ココナデ、胴部上位ナデ、中位以下ヘラケズリ後縦位にミダキ、内面―口縁部ココナデ、胴部ナデ。	石英・白色粒 内外一褐色	口縁部完形、胴部上半3/4及び下半一部残存。
42	土師器 甕	口径(14.9) 底径― 器高―	胴部は膨らみ、口縁部は外反して開く。	外面―口縁部ココナデ、胴部上位ナデ、中位ヘラケズリ。内面―ヘラケズリ。	チャート・黒色粒 内外一よい黄褐色	口縁部1/2及び胴部上～中位1/6残存。
43	土師器 甕	口径― 底径― 器高―	胴部は膨らみを持つ。	外面―ヘラケズリ後ナデ。 内面―ナデ。上位に指頭圧痕。	石英・チャート 内一灰黄褐色 外一よい黄褐色	胴部片。
44	土師器 甕	口径(16.9) 底径― 器高―	胴部は膨らみ、口縁部は直線的に開く。	内外外面やや荒れる。外面―口縁部ココナデ、胴部ナデ。内面―口縁部ココナデ、胴部ヘラナデ。	角閃石・白色粒 内外一明赤褐色	口縁部～胴部上位1/2残存。
45	土師器 甕	口径― 底径 6.7 器高―	胴部は中位に膨らみを持つ。底部は上がり底。	内外外面荒れ、不明瞭。外面―胴部縦位にヘラケズリ後ナデ、中位ココナデ、底部ヘラナデ。内面―胴部～底部ナデ。	石英・角閃石 内一褐色 外一よい褐色	底部完形、胴部下位1/3残存。
46	土師器 甕	口径― 底径 6.1 器高―	胴部は直線的に開く。底部は平底。	内外面―胴部ヘラケナデ。	石英・角閃石 内一よい黄褐色 外一よい褐色	胴部下位～底部完形。
47	土師器 甕	口径― 底径 6.1 器高―	胴部は膨らみを持つ。	内外面―胴部ヘラケズリ後ナデ。	石英・細砂粒 内面一黒褐色 外面一褐色	胴部一部残存、底部完形。
48	土師器 甕	口径― 底径― 器高―	胴部は膨らみを持つ。	外面―外面荒れ、やや不明瞭。ヘラケズリ・ナデ後、一部横位にミダキ。内面―ヘラナデ。	チャート・角閃石・細砂粒 内外一よい褐色	胴部1/4残存。
49	土師器 甕	口径― 底径― 器高―	胴部は膨らみを持つ。	内外外面やや荒れる。外面―ヘラケズリ後ナデ。内面―ナデ。胴部上位指頭痕。	石英・細砂粒 内外一灰黄色	胴部上位片。
50	土師器 甕	口径― 底径 5.0 器高―	胴部は膨らみを持って立つ。底部は上がり底。	外面―器面荒れ、不明瞭。胴部ナデか。内面―ハケナデ。	角閃石・白色粒 内一褐色 外一赤褐色	底部完形、胴部一部残存。
51	土師器 甕	口径― 底径 5.2 器高―	胴部は外傾して立つ。底部は上がり底。	内外面―ナデ。	チャート・白色粒 内外一明赤褐色	底部ほぼ完形。
52	土師器 (台付甕)	口径― 底径(8.8) 器高―	脚台部のみ。直線的に内傾しながら立つ。	内外面―一部工具痕が残るが、やや不明瞭。	チャート・白色粒 内一灰黄褐色 外一灰黄褐色	(脚台部)1/6残存。
53	土師器 甕	口径(20.0) 底径― 器高―	口縁部は外反して開き、口唇部直下は突出する。	内外面―ココナデ。	角閃石・白色粒 内外一よい褐色	口縁部1/4残存。
54	円筒埴輪	口径― 底径(15.5) 器高―	最下段片。	外面―タテハケ(6木/2cm)。 内面―指ナデ。	細砂粒 内一明赤褐色 外一よい褐色	破片。

第5表 SI-01出土遺物観察表(5)

No	種類	器種	法	量 (cm・g)	備考
55	石製品	磨礪み石	長さ:16.5 幅:6.1 厚さ:6.1 重さ:836.64	石材:砂岩	被熱を受ける。
56	石製品	磨礪み石	長さ:18.7 幅:5.2 厚さ:4.9 重さ:637.18	石材:砂岩	
57	石製品	磨礪み石	長さ:21.5 幅:6.5 厚さ:3.2 重さ:757.20	石材:結晶片岩	
58	石製品	磨礪み石	長さ:17.7 幅:5.95 厚さ:3.9 重さ:572.91	石材:安山岩	
59	石製品	磨礪み石	長さ:15.1 幅:5.7 厚さ:3.6 重さ:460.14	石材:安山岩	
60	石製品	磨礪み石	長さ:17.7 幅:16.2 厚さ:5.4 重さ:750.59	石材:安山岩	
61	石製品	磨礪み石	長さ:17.1 幅:6.2 厚さ:4.8 重さ:839.96	石材:安山岩	
62	粘土塊		長さ:8.1 幅:4.7 厚さ:2.8 重さ:70.31		
63	粘土塊		長さ:6.0 幅:4.55 厚さ:2.6 重さ:47.52		
64	粘土塊		長さ:4.3 幅:3.8 厚さ:2.5 重さ:23.96		
65	粘土塊		長さ:4.3 幅:3.8 厚さ:2.5 重さ:23.96		
66	粘土塊		長さ:5.2 幅:3.2 厚さ:1.6 重さ:17.18		
67	粘土塊		長さ:5.3 幅:3.85 厚さ:0.9 重さ:14.99		
68	粘土塊		長さ:4.6 幅:3.5 厚さ:0.7 重さ:10.93		
69	粘土塊		長さ:2.9 幅:2.25 厚さ:1.7 重さ:6.57		
70	粘土塊		長さ:2.7 幅:1.85 厚さ:1.2 重さ:3.47		

SI-02 (第4・12・13図、写真図版5・6・10~12)

位置:調査区の中央よりやや北東側に位置する。形状・規模:住居跡の北・南東隅部を近世以降と思われる穴(墓坑か)に切られるが、平面形態は方形と想定される。規模は3.95m×3.72mを測る。長軸方位:N-29°-Wを指す。床面:確認面からの深度は5~30cmである。6~14cmほどの厚さで黒褐色土とロームの貼り床を施す。



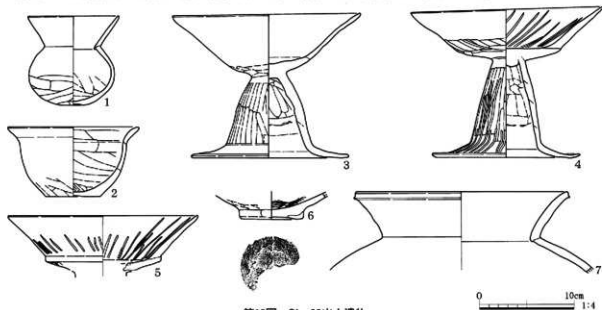
SI-02 土層説明

1. 黒褐色土 白色粒(軽石か、以下省略)・焼土を微量含む。
2. 黒褐色土 白色粒を微量、炭化物・焼土を少量含む。(1層よりやや明るい)
3. 橙 色 ロームブロックを主に、白色粒・焼土を微量含む。
4. 黒褐色土 白色粒を少量含む。ブロック状に炭化物(φ0.2~0.5cm)を少量、焼土(φ0.2~0.5cm)を多量含む。
5. 暗褐色土 白色粒を少量、炭化物・焼土を多量含む。
6. によい黄褐色土 灰白色粘土ブロック(φ0.2~0.5cm)、白色粒・炭化物・焼土を微量含む。
7. 黒褐色土 黄褐色粒(ロームか)を多量、焼土を微量含む。ブロック状に炭化物(φ0.2~1cm)を含む。
8. 褐色土 褐色土を主に、ロームブロックを含む。
9. ロームと黒褐色土 掘り方

第12図 SI-02

0 2m 1:60

床面はほぼ平坦であるが、住居跡の東壁中央付近にロームを主体に形成された不整形な高まり部分を確認した。土質は貼り床とは異なり、何らかの施設が構築されていた可能性もあるが、明確に判断できなかった。貯蔵穴・柱穴：確認されなかった。炉跡：地床炉と思われるが、明確な掘り込みは把握できなかった。住居跡の中央部やや北東の床面で楕円形状の範囲に焼土が確認された。備考：覆土中と床面から炭化材や焼土が多く確認されており、本住居跡は焼失した可能性が考えられる。遺物出土状況：床面直上から埴1点(1)・高坏2点(3・4)・小型壺片が出土した。壺(6)はSI-01床下出土の底部片と接合したため、本来はSI-01に帰属する可能性が高い。また、住居跡の南壁中央付近では葺編み石が集中して出土した。出土遺物の想定点数は、土師器埴3点以上・高坏5点以上・鉢1点・壺2点以上、葺編み石20点を数える。その他、ごく少量ではあるが、弥生時代と思われる土器片、土師質土器、須恵器、土鍾、リタッチドフレイクが出土しているが、これらは紛れ込み遺物と判断した(遺構外出土遺物参照)。時期：出土遺物の特徴から5世紀中葉と想定される。



第13図 SI-02出土遺物

第6表 SI-02出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形製・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 埴	口径 9.7 底径 2.4 器高 9.4	胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後上位ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部指ナデ。	赤褐色・肉閃石 内一褐色 外一明褐色	ほぼ完形。
2	土師器 鉢	口径(14.0) 底径(5.8) 器高 7.4	胴部は膨らみながら立ち上がり、口縁部は外反する。	外面一面面荒れ、やや不明瞭。ナデか。内面一ナデ。	黒色粒 内一赤褐色 外一暗灰黄色	口縁部～底部 1/5 残存。
3	土師器 高坏	口径(20.3) 底径 16.7 器高 15.2	坏部は下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反して開く。脚部は中位に膨らみを持ち、裾部広がる。	外面一口縁部～坏部ヨコナデ、坏部下位～脚部上位ナデ、脚部中～下位ヘラナデ、裾部ヨコナデ。内面一坏部ヨコナデ、脚部上位ナデ、下位～裾部ヨコナデ。	角閃石・細砂粒 内外一明赤褐色	ほぼ完形。
4	土師器 高坏	口径 20.3 底径 15.4 器高 16.0	坏部は下位に稜を持ち、口縁部は内湾気味に開く。脚部は直線的、裾部広がる。	外面一口縁部～坏部上位ヨコナデ、下位ヘラケズリ、脚部ヘラナデ、裾部ヨコナデ後放射状にミガキ。内面一口縁部～坏部ヨコナデ後放射状にミガキ、脚部上位指ナデ、下位ヘラケズリ、裾部ヨコナデ。	角閃石・細砂粒 内外一明黄褐色	ほぼ完形。
5	土師器 高坏	口径(22.3) 底径 — 器高 —	坏部は下位に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。	外面一口縁部～坏部上位ヨコナデ後幅の広い広いミガキ、坏部下位ナデ。内面一口縁部～坏部ヨコナデ後幅の広い広いミガキ。	細砂粒 内外一橙褐色	坏部 1/3 残存。
6	土師器 壺	口径 — 底径 6.6 器高 —	底部は上げ底。	外面一ナデ。 外面一ハケナデ。	チャート・細砂粒 内外一明黄褐色	SI-01床下出土遺物と接合。胴部下端一部、底部 1/2 残存。

第7表 SI-02出土遺物観察表(2)

No	器 種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
7	土 器 器 甌	口径(22.5) 底径 一 器高 一	口縁部は外反し、口唇部下は突出する。	内外器面荒れ、不明瞭。口縁部はヨコナデ。	石英・赤褐色粒 内外一様色	口縁部1/6・唇部一部残存。
No	種 別	器 種	法	量 (cm・g)		備 考
8	石 製 品	磨礪み石	長さ:17.8 幅:5.6 厚さ:2.7	重さ:419.57 石材:結晶片岩		
9	石 製 品	磨礪み石	長さ:16.2 幅:6.7 厚さ:4.1	重さ:689.61 石材:安山岩		
10	石 製 品	磨礪み石	長さ:16.8 幅:5.9 厚さ:4.6	重さ:727.63 石材:安山岩		両側面磨りか。
11	石 製 品	磨礪み石	長さ:15.4 幅:5.8 厚さ:4.0	重さ:532.98 石材:結晶片岩		
12	石 製 品	磨礪み石	長さ:16.9 幅:6.3 厚さ:3.1	重さ:413.57 石材:安山岩		
13	石 製 品	磨礪み石	長さ:14.9 幅:5.9 厚さ:3.6	重さ:382.90 石材:安山岩		
14	石 製 品	磨礪み石	長さ:16.0 幅:5.2 厚さ:3.7	重さ:452.73 石材:結晶片岩		
15	石 製 品	磨礪み石	長さ:20.7 幅:8.7 厚さ:2.8	重さ:912.68 石材:結晶片岩		
16	石 製 品	磨礪み石	長さ:16.1 幅:6.4 厚さ:3.1	重さ:485.92 石材:結晶片岩		
17	石 製 品	磨礪み石	長さ:17.2 幅:7.2 厚さ:3.7	重さ:679.92 石材:安山岩		
18	石 製 品	磨礪み石	長さ:16.5 幅:7.2 厚さ:3.9	重さ:540.24 石材:結晶片岩		
19	石 製 品	磨礪み石	長さ:16.4 幅:5.1 厚さ:4.6	重さ:498.18 石材:安山岩		
20	石 製 品	磨礪み石	長さ:16.6 幅:6.6 厚さ:4.2	重さ:535.82 石材:安山岩		
21	石 製 品	磨礪み石	長さ:16.8 幅:8.0 厚さ:5.1	重さ:825.04 石材:安山岩		被熱を受ける。
22	石 製 品	磨礪み石	長さ:13.4 幅:6.4 厚さ:3.8	重さ:448.73 石材:結晶片岩		
23	石 製 品	磨礪み石	長さ:16.8 幅:6.5 厚さ:3.0	重さ:438.20 石材:結晶片岩		被熱を受ける。
24	石 製 品	磨礪み石	長さ:16.8 幅:8.7 厚さ:2.6	重さ:537.04 石材:安山岩		被熱を受ける。
25	石 製 品	磨礪み石	長さ:13.6 幅:6.1 厚さ:4.9	重さ:592.10 石材:安山岩		被熱を受ける。
26	石 製 品	磨礪み石	長さ:18.2 幅:5.1 厚さ:2.8	重さ:340.63 石材:結晶片岩		
27	石 製 品	磨礪み石	長さ:20.3 幅:5.5 厚さ:3.2	重さ:497.04 石材:結晶片岩		

(2) 溝状遺構

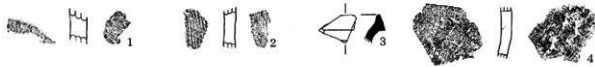
SD-01 (第4・14図、写真図版6・11)

位置: 調査区の西側に位置する。**検出状況:** 南北にほぼ直線的に走行する。北及び南側は調査区外に延び、調査区内において長さ約12.9mの範囲を調査している。底面の標高は北端部で53.17m、中央部で53.12m、南端部で53.33mである。**重複:** SI-01と重複し、本遺構の方が新しい。**形態:** 上端幅39~97cm、下端幅4~11cmを測る。断面はU字状を呈する。確認面からの深度は16~52cmを測る。**走向方位:** N-16°-W。**遺物出土状況:** 覆土中から円筒埴輪片(1・2)、土師器、須恵器(3・5・6)、中世陶器(4)、網雲母片岩が(7)出土している。**時期:** 中世の可能性が高いものの出土遺物が少なく断定しがたい。



SD-01 土層説明

1. 黒褐色土 ローム粒・焼土を少量含む。
2. 黒褐色土 ロームブロック(φ0.2~0.5cm)・ローム粒を多量、焼土を少量含む。
3. ぶよい黄褐色土 ローム層を主に、黒褐色土を含む。



第14図 SD-01



第15図 SD-01出土遺物

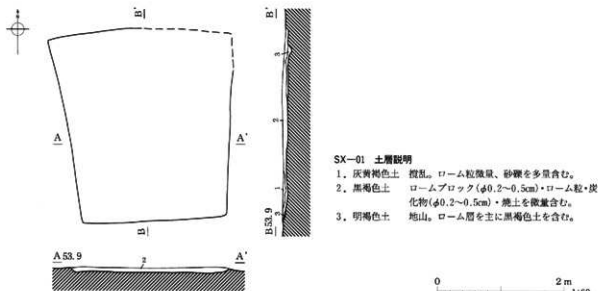
第8表 SD-01出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	円筒埴輪	口径 — 底径 — 器高 —		外面—タテハケ。内面—ナメハケ。	角閃石・細砂粒内—にふい赤褐色 外—橙色	破片。
2	円筒埴輪	口径 — 底径 — 器高 —		外面—タテハケ。内面—縦位にナデ。	石英・チャート内—明赤褐色 外—橙色	破片。
3	須恵器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	口唇部直下は突出する。	ロクロ成形。	白色斜紋石内外—灰色	比企丘陵。口縁部片。
4	中世陶器 (甕)	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は輪積み成形。	内外面—ナデ。	石英・チャート内—灰黄褐色 外—褐灰色	胴部片。
5	須恵器 (甕)	口径 — 底径 — 器高 —		内外面—ハケナデ。	石英・チャート内—黄灰色 外—褐灰色	胴部片。
6	須恵器 (甕)	口径 — 底径 — 器高 —		外面—肩部灰かぶり。内面—ナデ。	石英・細砂粒内外—灰色	胴部片。
7	網罟磁片	長さ:10.7 幅:8.9 厚さ:1.2 重さ:126.16g				

(3) 不明遺構

SX-01 (第16図、写真図版6)

位置：調査区の南東壁付近に位置する。重複：なし。形状・規模：残存深度はごく浅く、北西コーナーはほとんど残存していないが、平面形態は方形を呈すると想定される。規模は2.95m×2.85mを測る。確認面からの深さは2～7cmである。長軸方位：N-5°-W。出土遺物：覆土中から土師器片がわずかに出土した。いずれも図化困難な細片である。備考：炉・カマド・柱穴等が確認できなかったことと、出土遺物がわずかであったことから住居跡とは積極的に認定できず、不明遺構として取り扱った。時期：不明である。



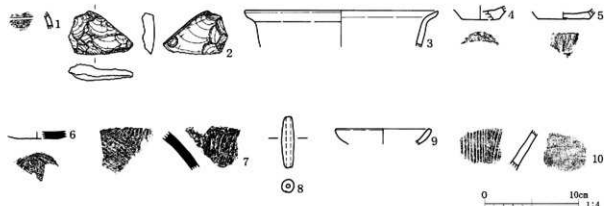
SX-01 土層説明

1. 灰黄褐色土 掘削。ローム粒微量、砂礫を多量含む。
2. 黒褐色土 ロームブロック(φ0.2~0.5cm)・ローム粒・灰化物(φ0.2~0.5cm)・焼土を微量含む。
3. 明褐色土 地山。ローム層を主に黒褐色土を含む。

第16図 SX-01

(4) 遺構外出土遺物 (第16図、写真図版11)

ここでは遺構外から出土した遺物・試掘調査 (TR-1) において採取された遺物に加え、各遺構への紛れ込みと判断した遺物を一括して掲載した。1は弥生土器もしくは縄文土器と思われるが、小片であり詳細については明確に判断できない。2は縄文時代に帰属すると思われるリタッチドフレイク。3～7は土師器・土師質土器・須恵器の小破片。8は土錘で、SI-02から出土しているが、後世の紛れ込み遺物と判断した。9はかわらけ、10は播り鉢の小破片である。



第17図 遺構外出土遺物

第9表 遺構外出土遺物観察表

No	器 種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調査手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	弥生土器 (蓋)	口径 — 底径 — 器高 —		外面—RL縄文施文後棒状工具による横位沈線。内面—ナデか。	角閃石・細砂粒 内—ぶい黄褐色 外—褐色	SI-02覆土中。縄文土器の可能性あり。
2	リタッチド フレイク	長さ: 4.6 幅: 6.8 厚さ: 1.7 重さ: 45.46 — — —	背面—刀部に細かな刻線。	石材: 黒色頁岩 腹面—右側縁に中央まで届く平端		SI-02覆土中。
3	土 師 器 葉	口径(20.5) 底径 — 器高 —	口縁部は短く外反する。	内外面—口縁部～胴部ココナデ。	角閃石・白色粒 内外—明赤褐色	TR-1。口縁部片。
4	土師質土器 環 か	口径 — 底径(4.0) 器高 —		内外器面荒れ、不明瞭。外面—底面は回転糸切り痕。	細砂粒 内外—ぶい黄褐色	調査区一括。底部片。
5	土師質土器 環 か	口径 — 底径(5.4) 器高 —		体部ロクロ成形。底部回転糸切り痕。	雲母・赤褐色粒 内外—明赤褐色	SI-02覆土中。底部片。
6	須 恵 器 環 か	口径 — 底径(4.4) 器高 —		底部回転糸切り後、ヘラケズリ。	白色粒・細砂粒 内外—黄灰色	TR-1。底部片。
7	須 恵 器 葉	口径 — 底径 — 器高 —		外面—平行タタキ。内面—ナデ。	石英・細砂粒 内—灰色 外—暗灰色	SI-02覆土中。胴部片。
8	土 製 品 土 錘	長さ: 5.4 幅: 1.4 厚さ: 1.4 孔径: 0.4 — — —			色調: ぶい黄褐色	SI-02覆土中。
9	中 世 土 器 かわらけ	口径(10.2) 底径 — 器高 —		ロクロ成形後、体部下平ナデ。	黒色粒 内外—褐色	TR-1。口縁部1/4残存。
10	陶 器 播 り 鉢	口径 — 底径 — 器高 —	体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は貯蓄気味に開く。底部は上げ底。	ロクロ成形。内外鉄軸。	石英 胎土—灰黄色 釉—褐色	瀬戸・美濃。TR-1。胴部片。

V まとめ

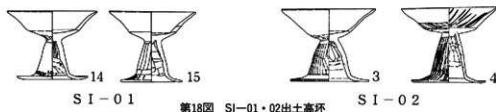
今回の調査では竅穴住居跡2軒(SI-01・02)から、いわゆる「和泉式土器」の良好な資料が得られた。特にSI-01からは数多くの土器が出土している。器種は、埴・高坏・甕の3種にほぼ限定され、その中高坏が6割以上を占有する状態にある。以下、出土した高坏について若干の補説を行い、結語としたい。

SI-01の高坏は、坏部が有稜・口縁部は外反気味～直線的に開くものが多い・脚部は下方に向かって開く・裾部の屈曲はやや弱い、といった器形を呈する。SI-02の4は、SI-01と類似した器形にあるがやや裾部の屈曲が強い。同じく3は、坏部の稜が不明瞭・脚部が大きく膨らむ等、SI-01にはみられない器形である。なお、SI-01の30は有段脚の可能性がある。

高坏の製作手法には、「組み合わせ手法」と「連続成形手法」の2手法が指摘されている(長谷川1988)。2手法の大きな違いは、前者が脚部と坏底部を接合するための脚穴と脰を別途製作するのに対し、後者は脚穴を製作せずに坏底部に脚部に粘土を継ぎ足して製作する点にある。SI-01の33は「組み合わせ手法」の状況を明確に観察できる資料で、32も脚穴をナデ整形している状況が把握できる。他にも数点(SI-01の14~17、同28・31等)において同手法が認められる。また、脚部の内面調整の状況を写真図版12に提示したが、ヘラナデ・指ナデを施すものが多く、他にヘラケズリ調整のみ(SI-01の15・16・18)、ヘラケズリ後ナデ調整(同19・20)を施すものが見られる。

これらSI-01・02の高坏は、先学による古墳時代中期土器編年の坂野I-2期(坂野1991)・中村III期(中村1999)に該当すると思われる。有段脚高坏が存在する可能性もあることも両氏の編年に矛盾しない。また、本項では触れることができなかったが、他の器種についても同編年に適合している。SI-01がSI-02よりも若干先行するものと思われるが、当該期類との比較検討からの検証を要する。

今回の調査では、わずかではあるが円筒埴輪片や平安時代の土師器片、中世土器片も出土している。本遺跡地に埴輪がもたらされた背景、平安時代及び中世における遺跡地周辺の様相を明らかにすることなども課題として残り、これらの解明については今後の調査と研究の進展に期するところが大きい。



第18図 SI-01・02出土高坏

参考文献

- 石橋杜一・志河内照彦他 1995『飯玉東Ⅱ・高橋田・柳越・梅沢Ⅱ・東牧西分・輪柳・家無し屋敷・石橋』見玉町文化財調査報告書第17集、見玉町教育委員会
- 長谷川勇 1988『IV-5 高坏の製作技法について』『社貝路遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第5集3分冊、本庄市教育委員会
- 駒宮史郎他 1976『本郷東・愛宕』埼玉県遺跡発掘調査報告書第7集、埼玉県教育委員会
- 坂野和信 1991『和泉式土器の成立について—序論—』『土曜考古』第16号、土曜考古学研究会
- 中村倉司 1999『埼玉県における5世紀代の土器—和泉式土器のゆくえ—』『東国土器研究』第5号、東国土器研究会
- 増田一裕 1989『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第14集、本庄市教育委員会
- 松本 完 2004『九反田(Ⅲ次調査)・観音塚(Ⅲ次調査)』本庄市埋蔵文化財調査報告第28集、本庄市教育委員会
- 宮崎朝雄・立石壽尚他 1982『後張遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第15集、1983『後張遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第26集
- 本庄市史編集室編 1976『本庄市史 資料編』本庄市
- 1986『本庄市史 通史編』本庄市

写 真 图 版



遺跡の位置と周辺の地形（国土地理院、平成12年10月撮影）



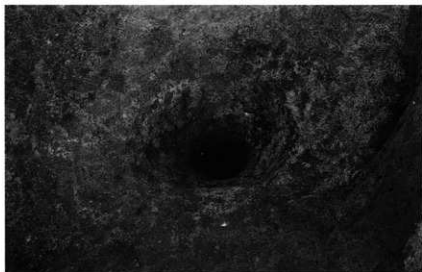
調査区全景



SI-01



SI-01 掘り方



SI-01 貯蔵穴



SI-01内SK-01
遺物出土状況



SI-01 遺物出土状況①



SI-01 遺物出土状況②



SI-01 遺物出土状況③



SI-02



SI-02 掘り方



SI-02 遺物出土状況①



SI-02 遺物出土状況②



SI-02 藁編み石出土状況



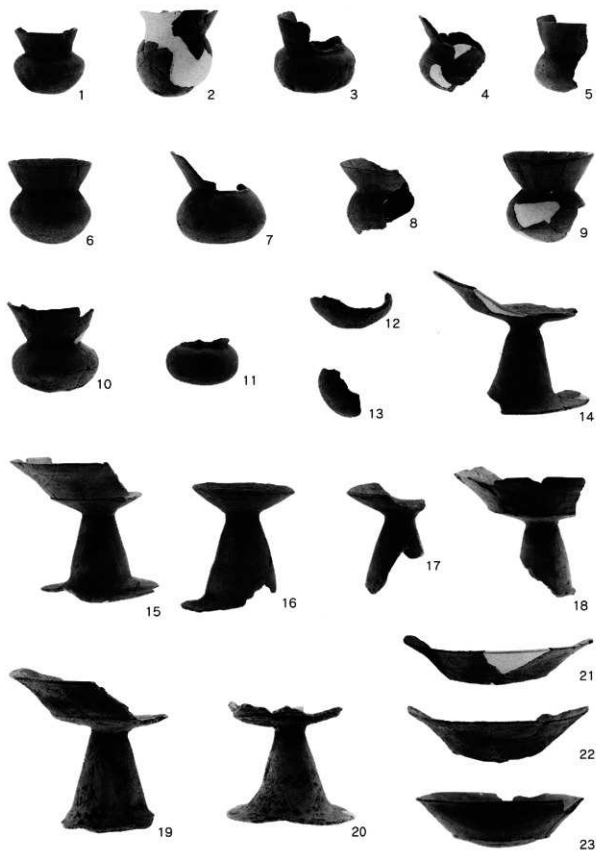
SD-01



SD-01 土層断面

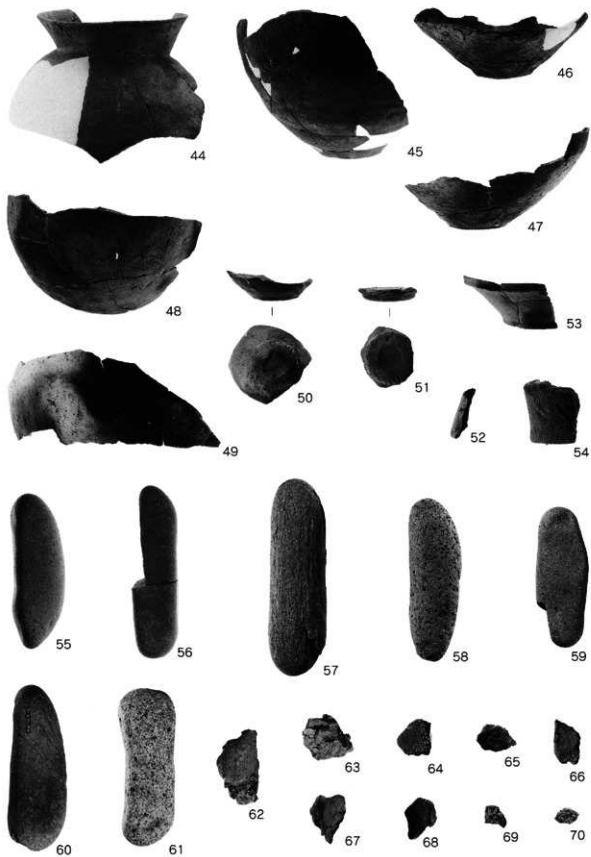


SX-01



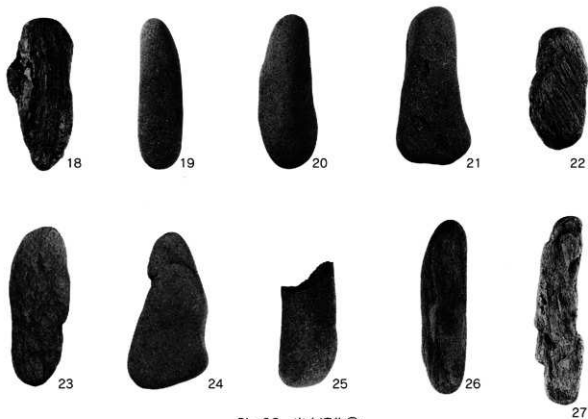
SI-01 出土遺物①



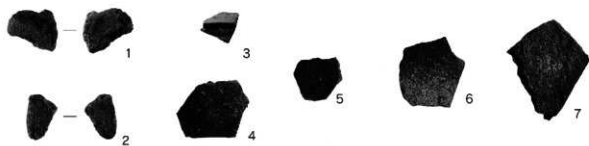


SI-01 出土遺物③

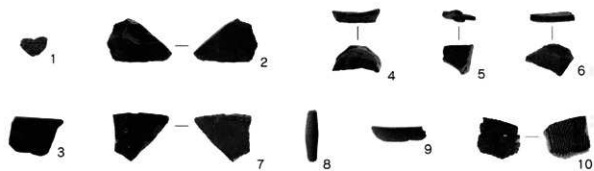




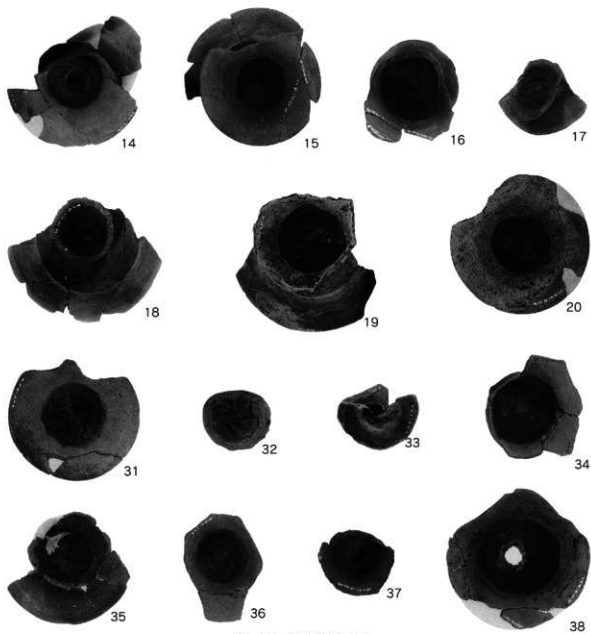
SI-02 出土遺物②



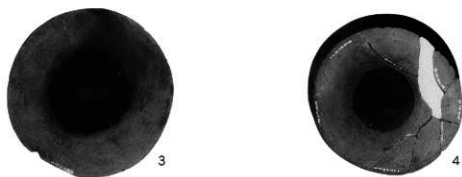
SD-01 出土遺物



遺構外出土遺物



SI-01 高环脚部内面



SI-02 高环脚部内面

報告書抄録

ふりがな	しろやまいせき							
書名	城山遺跡							
副書名	圓心寺本堂建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	-							
シリーズ名	本庄市遺跡調査会報告							
シリーズ番号	第12集							
編集者名	山本千春							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会内 電話0495-25-1186							
発行年月日	西暦2005(平成17)年5月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
城山遺跡	埼玉県本庄市 大字本庄3丁目1,511番1	112119	159	36° 14' 31"	139° 11' 26"	2005.1.12 ～ 2005.1.20	305.4㎡	圓心寺本堂 建設
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
城山遺跡	集落	古墳時代中期 時期不明		竪穴住居跡2、溝1 不明遺構1		円筒埴輪、土師器、須 志器、かわらけ、陶磁 器、土鏝、薨織み石		

本庄市遺跡調査会報告 第12集

城 山 遺 跡

圓心寺本堂建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成17年5月20日 印刷

平成17年5月25日 発行

発行／本庄市遺跡調査会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

本庄市教育委員会内

電話 0495-25-1186

印刷／朝日印刷工業株式会社

